



# ひかりのこつうしん

No.8

## 「実りの秋を迎えて」

ひかりの子幼稚園

2021年11月

幼稚園の木々が色づき、落ち葉のじゅたんが美しい晩秋を迎えています。

子どもたちはどんぐりやむくろじを集めたり、黄色く色づいたイチョウの葉を集めてバラの花束を作ることを楽しんでいます。

先日、収穫感謝祭礼拝の時を各クラスで持ちました。高陽先生から「収穫の恵みに感謝して頂くのはもちろんのこと、捧げるということは余ったいらぬものを捧げるのではなく、自分の持っている大切なものを捧げることが神さまが喜ばれることなんだよ」というお話を子どもたちは聞きました。自分の持っている大切なものを差し出せるのは、相手のことを大事に思う気持ちがあるからです。

ひかりの子幼稚園では、お隣の交野教会が以前より支援をしている「志絆会」という団体に「平和を祈る日」の献金の一部を捧げることを検討しています。皆様から寄せられる尊い献金が、神さまのご用のために使われますことを祈ってまいります。

今、助けを必要としている人々の力になろうとする気持ち、これは「クリスマス」にも繋がっています。

神さまは自分の大切なひとり子「イエスさま」をみんなの救い主としてこの世にお送りになりました。それは私たち一人ひとりを尊い大切な存在として、神さまが愛して下さり、そのイエス様のお誕生日がクリスマスです。子どもたちは聖書のお話を聞いたり、おうちの人への内緒のプレゼントを作ったり、発表の練習をする中で、クリスマスの本当の意味を子どもなりに理解して、もらう喜びだけでなく捧げる喜びを知り、このアドベントの時期を過ごしています。

コロナがこのまま落ち着けば、今年は保護者の皆さんと共にクリスマスをお祝いすることができそうです。教職員一同、その日を楽しみにしております。

園長 松本 直子

### 〈収穫感謝祭の起源〉

1620年9月、メイフラワー号に乗って信仰の自由を求めて、ピューリタン（プロテスタントの大きなグループ）であったピルグリム・ファーザーズが、イギリスからアメリカの植民地に到着した土地で新しい生活を始めました。



初めての冬は思っていたより厳しいものでした。男性78人と女性24人の人々の半数ほどが飢えと寒さで亡くなったのです。やがて春が来て先住民族の人びとに助けられ、土地を開墾して作物を植えます。秋になって最初の収穫を得ることができました。そのことを感謝して先住民族の人々を招き、共に収穫を神さまに感謝したのが起源と言われています。しかしこの後多くの移住の民は、最初に彼らを暖かく迎え、冬を乗り越えるのを助けてくれた先住民の土地を奪い、彼らを居留地に閉じ込めてしまう歴史をたどり、自分たちの生活が豊かになっていったことだけを感謝するようになってしまったのです。近年になって、こうした感謝祭の出来事も見直され、自らの力で得た豊かさ以前に、そこに彼らを助けた人々の存在、また神さまの存在を謙虚に振り返る、そのような時として感謝祭を迎えることが大切なのではと考えられるようになってきたと言われています。

※志絆会(しはんかい)は、大阪・釜ヶ崎で毎月800食のカレーの炊き出しを寄付と有志のボランティアだけで20年以上継続してきた団体です。これまで届けてきたカレーの数は、20万食以上。任意団体として活動を続けてきた志絆会も20周年を迎え、2015年4月には「NPO 法人炊き出し志絆会」として、法人化されました。

